

## 授業を改善すること

2023.2.1

「授業改善」教員なら、よく目にし、よく聞く言葉である。当たり前すぎて、誰も反応しない。では、どのくらいの先生方が、自分の授業を改善しているのだろうか。経験を積んでいけば、必ず改善するというものでもない。逆に、改善の意識をもたぬまま、経験だけを重ねていった授業のほうがこわい。

では、どうすれば、授業を改善することができるのだろうか。自分で、1学期間、あるいは1年間、それとも数年間、テーマを設けて授業改善に取り組む先生がいる。教員になって6年目や11年目あたりに行うことになっている研修を契機に授業改善に取り組む先生がいる。それ以外でも研修の機会があり、それを生かす先生もいる。

そのチャンスはあったとして、授業を改善することはできているのだろうか。先生方に、自分の授業を改善したという実感はあるのだろうか。中学校の場合、このところが、甚だ心もとない。毎年、どの中学校でも、研究主題や副主題を設定し、研究の名のもとに、授業改善に取り組んでいるはずなのだが、実際のところ、どのくらい成果は上がっているのだろうか。

そこで、私の学校では、1人2回の研究授業を行うこととした。1人1回では、授業が改善したのかどうかは、わからない。事後の協議会を開いても、ああでもない、こうでもないとなりがちである。あるいは、当たり障りのないことを言い合って終わる。これでは、授業改善の道のりは遠い。

1人2回であれば、1回目の研究授業が終わり、事後の協議会では、2回目の授業では、こうした方がよいという話ができる。授業者は、アドバイスをもとに、2回目の研究授業を行う。その後の協議会では、1回目と比べて、2回目の授業はどうだったのかという話ができる。協議内容を絞り込むことができ、わかりやすくできる。何よりも、授業者自身が、2回目の授業の方がよかったという実感をもつことができる。参観者も、2回目のここがよかったと、具体的に述べることができる。すなわち、授業を改善することができるのである。

この方法がよいのは、何年も研究授業を行ってきた先生方が、1回目と2回目を比較することで、ようやく授業を改善するという経験をできたことである。「こういうことか」とわかったことである。一度、授業改善を経験できた先生は強い。あとは、自分のペースでも取り組むことができるだろう。

私の学校では、授業を担当している先生方が、全員、1人2回の研究授業を行った。当たり前のことのようにも思えるが、そうではない。簡単なことではない。全員の先生方が、授業改善を経験することができた。

一番、研究授業を参観したのが私で40回以上に及ぶ。次が、教頭先生と研修主任である。2人とも、かなりの研修を積んだことだろう。ベストの授業などない。ひたすらベストに近いベターな授業を追い求めるだけである。みんなで取り組むことには意義がある。みんなでやればできる。みんなでやるから効果が上がる。そのことがわかった1年であった。